

「陸奥話記」と「和田家文書」(9)

「陸奥話記」(9)・「頼義軍容を整う」「小松の柵攻略」

(陸奥話記)「頼義軍容を整う」將軍大いに喜び、三千餘人を率ゐて、七月二十六日を以國を發す。八月九日、栗原の郡營崗に到る。(昔、田村麻呂蝦夷を征するの日、此に於て軍士を支へ整ふ。其より以来、號して營の塹と曰ふ。亦猶存す。) 武則真人、先づ此の處に軍す。邂逅に相ひ遇ひて、互に心懷を陳べ、各以て涙を拭ふ。悲喜交至る。同十六日、諸陣の押領使を定む。清原武貞を一陣となす。(武則が子なり。) 橘貞頼を二陣となす。(武則が甥なり。字は逆志方太郎。) 吉彦秀武を三陣となす。(武則が甥、又贅なり。字は荒川太郎。) 橘頼貞を四陣となす。(貞頼が弟なり。字は新方次郎。) 頼義朝臣を五陣となす。五陣の中、又三陣を分つ。(一陣は將軍、一陣は武則真人、一陣は國內の官人等なり。) 吉美侯武忠を六陣となす。(字は貝澤三郎。) 是に於て武則遙かに皇城を拜し、天地に誓ひて言く、「臣既に子弟を發し將軍の命に應ず。志節を立つるに在り、身を殺すことを顧みず。若し苟も死せずんば、必ず空しく生きじ。八幡三所臣が中丹を照らしたまへ。若し身命を惜しみ死力を致さずんば、必ず神鎬に中りて先づ死なん」と。軍旅の臂を合はせて、一時に激怒す。今日鳩有り、軍上を翔る。將軍以下悉く之を拜す。

(陸奥話記)「小松の柵攻略」則ち松山の道に赴く。磐井の郡中山の大風澤を以て、翌日同郡の萩の馬場に到る。小松の柵を去ること五町有餘なり。件の柵は、是れ宗任が叔父僧良照が柵なり日次宜しからず、並びに晩景に及ぶに依つて、攻撃の心なし。而して武貞・頼貞等、先づ地勢を見んが爲に近く到るの間、歩火を放ちて柵外の宿廬を焼く。是に於て城内奮ひ呼び、矢石亂發す。官軍合應して争つて先登を求む。將軍武則に命じて曰く、「明日の議俄に乖いて、當時の戦ひ已に發す。但し兵は機の發するを待ち、必ずしも日時を撰ばず。故に宋の武帝は往亡を避けずして功あり。好く兵機を見、早晩に随ふべし」と。武則が曰く、「官軍の怒り猶水火の如し。其の鋒當るべからず。兵を用ゐるの機、此の時に過ぎじ」と。則ち騎兵を以て要害を圍み、歩率を以て城柵を攻む。件の柵の東南は深流の碧潭を帶び、西北は壁立の青巖を負ふ。歩騎共に泥む。然るに兵士深江是則・大伴員季等、敢死の者二十餘人を引率し、劍を以て岸を鑿ち、鉾を杖て巖に登る。柵の下を斬り壊つて城内に亂入、刃を合はせて攻撃す。城中擾亂、賊衆潰え敗る。宗任八百餘騎を將て城外に攻め戦ふ。前陣頗る疲れて之を敗ること能はず。茲に因つて、五陣の軍士平眞平・菅原行基・源眞清・刑部千富・大原信助・清原貞廉・藤原兼成・橘孝忠・源親季・藤原朝臣時經・丸子宿禰弘政・藤原光貞・佐伯元方・平經貞・紀季武・安倍師居の方等を召し、合せ加へて之を攻む。皆是れ將軍の麾下坂東の精兵なり。萬死に入りて一生を忘れ、遂に宗任が軍を敗る。又七陣の陣頭武道要害の處に支ふ。宗任が精兵三十餘騎遊兵と爲つて襲ひ来る。武道迎へ戦ふ。殺傷殆ど盡く。賊衆城を捨てて逃

げ走る。則ち火を放つて其の柵を焼き了んぬ。射斃す所の賊徒六十餘人、疵を被つて逃ぐる者、其の員を知らず。官軍死する者十三人、疵を被る者百五十人なり。

(文書 9-1)「陸奥物語・第二巻」(北鑑・第四十巻)抜粋

康平五年(1062)春、源頼義國司の任了りぬ。依て後任高階經重、陸奥國司相成り勇みて境に入り任に着きたれど、一步磐井を巡見せるに安倍の軍陣かしこに在りければ怖れおののきて歸洛せり。朝議紛々の後、頼義拜して再任を承はれり。しかさず頼義境に入りて軍策す。先づ以て出羽の光頼並に舍弟武則らに全兵挙を請ふれば、是於て秋七月、子弟と萬騎余の兵を率いて天童より関山峠を越え廣瀬川添に多賀城に入る。七月二十六日京師より發したる官軍八月九日に栗原宮岡に兵を併せ、是於て軍師を律し營塹と曰く。互に心懷を陳べ各々以て戦征の割を定むれば、

第一陣清原武貞 第二陣逆志方太郎 第三陣芒川太郎

第四陣宇新方次郎 第五陣源頼義

亦五陣中三陣に分け源義家、次に清原武則・真人、次に清原光頼。

第六陣宇斑目四郎 第七陣宇貝澤三郎

ら何れも清原一族に依りて占らる。惣勢併せて六萬三千也。全軍挙げて松山に至りて磐井中山大風澤に赴き、翌日荻馬場に到る。件の柵は小松柵なり。是を向い討つは安倍良照にして城既に空け、鳴子及び岩出山の赤村之介を捨城なさしめて兵を併す。戦はずして手火に燃ゆ両に出て志波姫柵にて藤原經清と軍を併せ、更には安倍宗任が馳着きたるに両者宗任に従へて手火に志波姫柵を灰とし、小松柵を圍む官軍の背後に迫り攻め討たれし官軍は平眞平・菅原行基・源眞清・安倍師方・丸子宿祢弘政・紀季武・平經貞・藤原光貞・佐伯元方・藤原時經・大原信介・源親季・刑部千富・橘孝忠・藤原兼成・清原貞廣ら率兵一千人。宗任指揮のもと是等を討果したり。更にして官軍の輜重を奪ひて仲邑に仮陣すところに小松柵を燃し、道照・宗任と軍を併せたり。道照これまで兵凡そ三百を殉せむ。

(文書 9-2)「安倍古事録四」(和田家資料 5、奥陸羽古代史諸證 1)抜粋

朝廷に於ては詮なく經重を退けて、康平五年(1062)六月頼義を征夷大將軍に任じ、茲に至って清原一族は七月に挙兵し、八月九日栗原一迫に源軍と兵を併せ、今までの怖感を去りける。征夷軍の陣立は、清原武貞・橘貞頼・古彦秀武・橘頼貞・源頼義・清原武則・吉美侯武忠・清原武道ら七陣にて、白河より伊津沼に安倍の先鋒を押突く如く抜き、玉造より磐井に進軍し荻莊の小松柵にて大なる攻防が夜を徹して激戦せり。

此の戦にては安倍軍の戦殉一人もいささず、官の死傷者は續出し、その中に深江是則・大伴員季・平眞平・菅原行基らの官軍武將が討死せり。安倍兵法としては、小松柵は敵總勢を結するに在り、その囷戦にて敗れたりと見せて要害の地へ誘ふ戦法なり。然るに、源軍總結までに防ぐ能はず、安倍軍は高梨宿に退きて囷軍を本陣と見せ、實軍は征夷軍の

後方に夜をして行軍し輜重の敵を討って兵糧・武具を奪取し、日高見河を衣川に水運した頃、高梨本陣はもぬけの空なり。時に、頼義地たんだ踏んで怒るも、先の戦の如く兵糧・武具は安倍軍に奪取され、進軍も高梨に釘付けらる如く、ただ全軍の警に気を配したり。

(文書 9-3)「衣川合戦之談義」(北鑑・第八卷)

陸前迫に築きし長沼柵をして多賀城より北上せる頼義の軍を、軍謀に制せる安倍貞任の先陣に配したるは五百騎にして、もとより本腰の戦に備へたるに非ず。築館に一千騎そして志波柵に一千二百騎を配したる軍は、源氏の進軍をおくれなやましめたる策謀にして、柵にこもりて戦うなく、武軍は利非らざれば引き、戦に勝算ありては攻めなさしむる進退自在を兵に委したる先陣たり。その先陣にありきは金氏一族にして、源軍は常にその不意を襲はれたり。

安倍軍はのぶせりの群盗に化身し、本陣の多賀城をも源軍留守に襲ふこと暫々にして兵を常に配し置くかざるを餘議なくさしたるに、軍列常にして山間なる視界を閉ざすを進まざるを目算にせる安倍軍は、その視界の開けたる迫道・長沼柵に遁垣し、夜半に源軍の夜営陣を襲ふる神出鬼没の奇襲を得手とせる戦法にて、常に軍馬を殺され亦是盗引し更には車輛を荷ごとに盗むるありて、攻めるに當りてはその警戒難儀ことの他大なりと曰ふ。康平五年(1062)春、雪解を追へて出陣を謀れるに、反忠せし清原軍との併合ならず。徒らに初夏の五月、鳴子道を清原二萬騎を以て古川へと進軍し、その先駆の報せに頼義は天に仰ぐほどに安気をせり。

清原勢は安倍の軍策を手取りに覺りて徒軍を花山に赴かしめ、一迫にて志波柵の安倍軍なる背に忍ばせる徒兵二千人。築館に一千人を配したり。然るに伊豆沼より来たるは白旗をかがげし源軍耳にて、安倍の軍は紫波柵に築館に一兵も不在にして、その軍策は既にして清原反忠とて報せは衣川本陣に知れ渡りてもぬけの空たり。よって安倍軍は小松柵に集り、遂にしてその戦は安倍軍と源軍の激しき攻防と相成りぬ。此の地は石坂柵とあり何れも難攻不落たり。安倍良照、小松柵にあり。家臣の金氏一族が石坂に防ぐ戦に源氏・清原氏の軍三萬はたづろぐばかりにて、その日夜をして戦殉多く屍山を野辺送りにせり。時に一合戦の間切とて、當時なる戦の習へには休戦の刻ぞ決まりてあり。屍を集むる間、双方ともに戦ふは禁ぜられたり。衣川にありては枇杷柵に安倍一族な一同將士集りて軍策を激論に達し、その策謀に双論せしは関戦か陣場戦かとの論にして、関戦は退路に窮し陣場戦は長期に保たれざるの二論たり。ともあれ、安倍軍は道のせまきに岩石にて閉ぎ、逆茂木を置えて矢牒を以てかしこに固め、川橋を落し源軍の進軍を防ぎける備かしこに施されたり。六月に保たれず小松柵・石坂柵を放棄せし安倍軍は、こぞりて磐井太田川の衣の関を十重の濠・二十重の柵や楯垣に陣を固めけるにや、源軍なにゆいぞ小松の柵なる焼跡に仮陣を動かざりき。衣川にては軍謀未だその決に達せざる處

に良照、激怒して曰く、抑々戦を明日にも迫まりきに、徒らに論に日時を経しはおろかなり。既にして六十人を殉じ奉りしも、吾は敵に當り六百騎を討たり。汝等、去年なる黄海柵・薄衣の柵だけの清原氏が反かざるときになる軍策は今の源軍には通用をしない失策なり。とて良照が貞任に今迄になる源軍の攻め方謀を教へたり。貞任曰く、清原が我等に反忠しては冬期にても戦には源軍のやまざる攻手にかまへざるを得ず。さあれ我らの軍謀、清原氏ぞ知られざる軍策に非らざれば、吾らの勝算ありまづく。吾が一族の生死を賭けたる決戦にありきは厨川と決するも、それに至る間の白鳥柵・大麻生柵・四丑柵・背腹柵・鳥海柵あり。更にして
黒澤尻柵・鶴脛柵・比与鳥柵・矢巾柵ありては、いづ方も寒入りに至る期に至まで厨川柵に敵を寄せまず。それなる間に於て江刺なる久井餘柵は建固なれば心して敵にかかるべし。とて貞任が心に襲ふるは、清原一族が源氏に加軍せるの軍謀崩れにその苦慮ぞ、隠せざる悩苦しを今にせり。衣川関に迫る源軍がしばらく出陣をためらうは、太田川落合なる衣川関それに迫るとも束稲山の見告あり。磐井山なる見告に報られては如何なる失態あるやも知らせる苦慮のありける対策に軍謀を永らいたり。清原氏を先鋒に小松柵を出陣せる源軍は、清原武則の軍案に決して衣川関に總勢八萬騎寄せ行きたり。

寛政二年七月三日

岡村勘十郎

(文書 9-4)「厨川太夫貞任之遺言」(東日流六郡誌・全、安倍王国盛亡之抄)

世創より、日輪は西より昇るなし。しかるに、倭人は西より旭日せんとせり。何時の世にか、天然の裁きぞありけむ。一族を安かれとて、暫し北辰に遁忍なして、再起せよ。日高見国は、東日流ををして中央なり。渡島国、流鬼国の領ぞ続く処にぞ、一族が安住ありけむ。

康平壬寅五年(1062)正月 日

貞任

右、浄法寺藏なり。

寛政十二年(1800)八月

秋田孝季

「論 考」

康平五年(1062)は、決戦の年になります。ここで、「十二年戦争」のこれまでの経過を整理してみます。

永承六年(1051) 藤原登任、陸奥守となり、秋田城介・平重成と共に安倍氏討伐を謀り、「鬼切部」で戦うが、朝廷軍は敗北する。対抗策として、源頼義を陸奥守に選任する。「奥州十二年合戦」始まる。(『吾妻鑑』)

永承七年(1052) 「上東門院の御病悩による大赦」により、これまでの安倍側の「反逆」を不問にする。

天喜元年(1053) 源頼義、鎮守府將軍を兼務する。安倍頼良と「伊豆沼」で談義するが決裂する。

天喜二年(1054) 「天喜二年の巨星光り失せ逝く」(おうし座の超新星)。

天喜三年(1055) 妖星の出現を占い、これに伴い八郎則任を東日流十三湊に移住させる。気仙の郡主・金爲時、宇曾利富忠に米・稗の援助・救済を行う。

天喜四年(1056) 「阿久利河の事件」「平永衛の斬殺」「藤原經清の離反」が起こる。

天喜五年(1057) 源頼義、「宇曾利富忠」「清原武則」に「利」を説き、配下とする。安倍頼良と宇曾利富忠の会談において、頼良、刺客の矢に負傷し死す。安倍軍、「黄海」に於て、復讐戦を行い源氏連合軍に大勝する。源頼義、国解を奉り官符を得て諸国の兵を徴発する。

康平元年(1058) 源氏軍に諸国の軍兵・兵糧、集まらず源頼義、安倍氏への攻勢できず。安倍貞任、一族を衣川館に集め、敵襲に備える。

康平二年(1059) 安倍頼時の三回忌を和賀・極楽寺で行い、東日流・石塔山に埋葬する。源頼義、「蝦夷は蝦夷以て討つ」の故事を述べ、朝廷を説く。

康平三年(1060) 安倍貞任は、生保内から庄内を巡り倭人および協力者を探索し、追放・刑罰に処すと共に「防御・避難体制」を構築する。

康平四年(1061) 源頼義の任期満了により、高階経重を陸奥守に補す。安倍貞任、主将を衣川・大館に集め、戦の勝敗に拘わらず、「生命の大切さ」を説く。

康平五年(1062)は、いよいよもって「十二年戦争」の決戦の年になります。

この時には、清原氏の「反忠」は明確であり、源氏・清原軍との戦は、苦戦が予想されています。安倍氏の統領である安倍貞任は危機感を露わにして、此の年の正月に「遺言」「遺文」(文書 8-4)として残しております。荒覇吐神の教えに基づく「平等思想」と「人命尊重」の思想を縷々述べており、もし戦に敗れても新天地があり、これまでの伝統を生かし各々の考えに基いて行動する事を説いております。

いよいよ最後の決戦が始まり、康平五年(1062)七月、源頼義は任官の無いまま源氏・清原連合軍を率いて北上します。国道 457 号線は、奥羽山脈の東麓を貫く、宮城県白石市から仙台市、大崎市、栗原市を経て岩手県一関市に至る国道ですが、この道は古来の街道を繋

ぎ合わせた「ジグザグ街道」となっています。

「栗原郡の營崗」は栗原市の北西・国道 457 戦の側にあり現在は「屯岡八幡宮」が建っています。この神社は坂上田村麻呂の創建とされ「屯(たむろ)」は「営」と同義で「軍隊の留まる所」で、田村麻呂の征夷軍も、ここに集結した場所です。

出羽の清原勢は、秋田、山形方面から国道 475 号線沿いに北上し、この「營崗」に源氏勢力と合流し、六陣の軍体制を構成します。(別稿及び文書では七陣)

ここで体制を集結した、源氏・清原軍は、さらに現在は国道 457 号線の終点となっている付近の「萩の馬場」(一関市萩荘黒沢)に到り、「小松の柵攻略」戦が開始されます。

「小松柵」の比定地は諸説ありますが、『安倍氏の「柵」の構造』(平泉文化研究年報、第四号、羽柴直人)に、次のように述べております。

「磐井川は溪谷で、渡河地点限られている。その一つに南岸の大久保(萩荘地区)から北岸の鬼吉(赤萩地区)付近への渡河地点がある。この地点は兩岸に絶壁がなく近辺では唯一の渡河地である。この渡河地点を閉塞し、交通遮断すれば磐井川北岸への上陸を阻み、ひいては奥六郡への進入を防ぐことができる。」

これらの地勢から、著者は、小松柵(安倍氏の陣)は磐井川の北岸、萩馬場(源・清原氏の陣)は南岸と想定しています。「話記」にも小松柵について「東南は深流れの碧潭」「西北は壁立の青巖」と記しており、柵の位置は現在の「厳美公園」の東 5Km ほど、山と河が迫った地形の場所が考えられます。

和田家文書「東日流六郡誌大要」には「小松柵趾図」が掲載されておりますが、これを見ても、その様子が伺えます。

ここで、小松柵の戦闘に入る前に、これまでの両軍の動向を整理して見る必要があります。此の年(1062)の春、源氏軍は出陣を謀りますが、清原軍の体制が整う五月になってから行動を開始します。源氏軍本体は三千人程度ですが、清原軍を合せると六萬三千人となります。安倍氏側も、これ等の北上を黙って見ていたのではなく、「築館に一千騎」「志波柵に一千二百騎」を配置し、源氏・清原軍の進軍を遅れ悩ませる神出鬼没のゲリラ戦を展開します。そして、それらの柵を死守するのではなく、本戦に備え兵士は小松柵に集結します。

源氏・清原軍もこれら抵抗に合い、五月に行動を起こし八月にやっと「栗原の營崗」に到ることが出来たのです。しかし、その軍勢は六萬三千ともなり、安倍軍の三千程度に比べると格段の差となります。

安倍軍としては、正面から戦っては、勝ち目はありません。小松柵の戦でも凶戦略とゲリラ戦を採らざるを得ませんでした。小松柵を「本陣」と見せかけ、実は「カラ」にして「実軍は征夷軍の後方に夜をして行軍し輜重の敵を討って兵糧・武具を奪取」し、攪乱して損害を与えます。そして、8 月 17 日に「小松柵」を焼き払い撤退し、その跡に源氏・清原軍が侵入します。

この戦いの人的損害を、「話記」では「射斃す所の賊徒六十餘人、疵を被って逃ぐる者、其の員を知らず。」「官軍死する者十三人、疵を被る者百五十人なり」としているが、「文書」では、撃たれた官軍として16人の兵士の名を列記した後に「卒兵一千人」、自軍の殉死として「兵凡そ三百」と記しております。両書には大きな差が見られますが、両軍ともに大きな損傷があったようです。

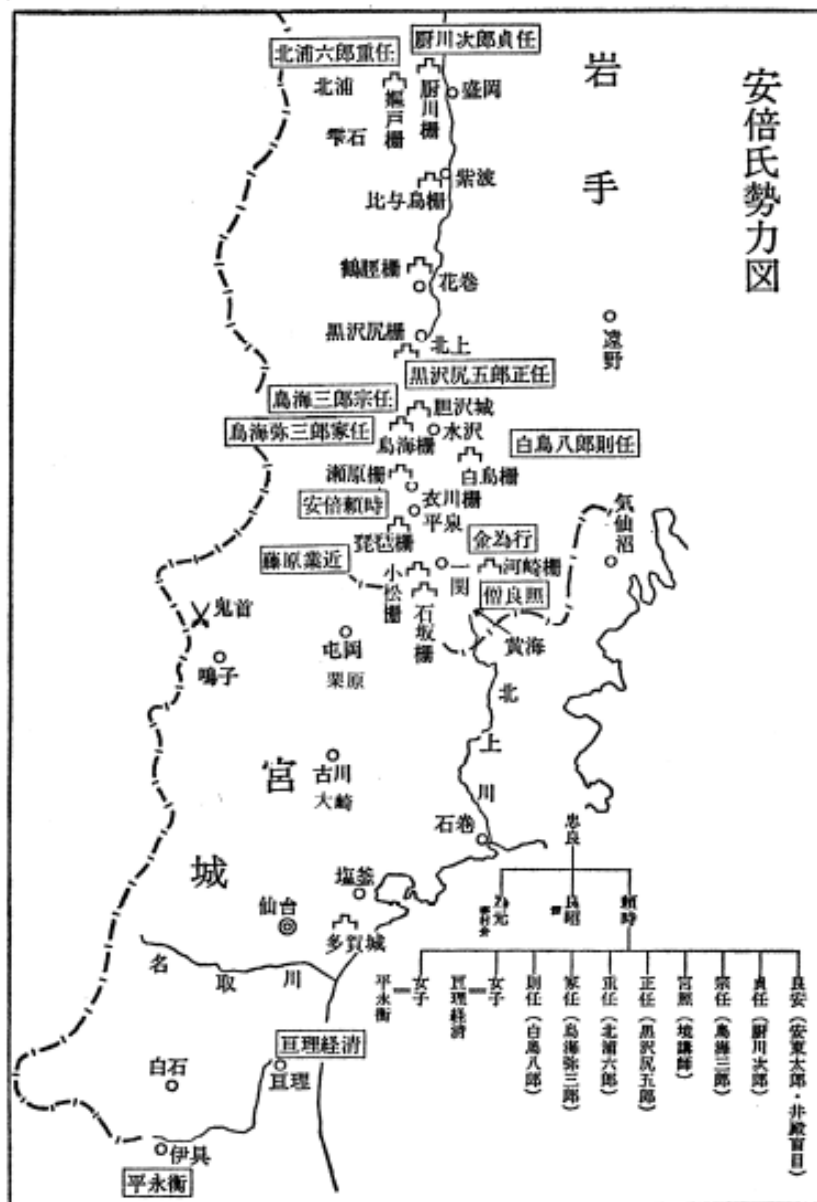
その後、当時の慣習により「屍を集める間」の休戦に入りますが、源氏・清原軍は「焼跡の小松柵」に滞留して暫くは動く気配がありません。その間、安倍氏側でも衣川に集り、今後の作戦会議が開かれます。

安倍良照は、先の「黄海柵の戦」の時は清原軍の反抗は未だ無く勝利したが、今は、安倍軍の戦法を熟知している清原軍が敵に廻っている。「これまでの軍策は今の源軍には通用しない失策なり」と危機感を訴えます。これに対し、安倍貞任は、「清原軍が反忠したからには、連合軍は冬期にも関わらず攻める事になる」「清原軍の知らざる戦法でなければ、吾らの勝利は無い」と考えます。「決戦場は厨川と決し、それに至る諸柵を堅固にして、寒入の季節まで厨川柵に敵を寄せつけ無い」

作戦を提案します。そして潜入・諜報合戦にも充分配慮すべきと警告します。

以上

岩手



東日流六郡誌大要 安倍安東秋田氏遺跡
八十八景記・第三十三番

「がり」地名の研究

肥前から逃げた愛瀬詩

2026年9月12日(土)
和田家文書研究会
古賀達也

「大曲(おおまがり)」地名の一覧

2

町域 **大曲** (おおまがり) 北海道雨竜郡幌加内町

町域 **大曲** (おおまがり) 青森県むつ市

町域 **大曲** (おおまがり) 青森県南津軽郡田舎館村

町域 **大曲** (おおまがり) 宮城県名取市

町域 **大曲** (おおまがり) 宮城県東松島市

町域 **大曲** (おおまがり) 秋田県能代市

町域 **大曲** (おおまがり) 秋田県大仙市

町域 **大曲** (おおまがり) 福島県相馬市

町域 **大曲** (おおまがり) 茨城県取手市

町域 **大曲** (おおまがり) 群馬県邑楽郡板倉町

町域 **大曲** (おおまがり) 神奈川県高座郡寒川町

町域 **大曲** (おおまがり) 新潟県燕市

町域 **大曲** (おおまがり) 佐賀県神埼郡吉野ヶ里町



【北海道】

おおまがり（大曲）北海道網走市大曲
おおまがり（大曲）北海道北広島市大曲
まがりふち（曲淵）北海道稚内市声問村曲淵
おおまがり（大曲）北海道美唄市西美唄町大曲
おおまがり（大曲）北海道上川郡美瑛町三愛大曲
おおまがり（大曲）北海道磯谷郡蘭越町大曲
おおまがり（大曲）北海道雨竜郡幌加内町大曲
おおまがり（大曲）北海道枝幸郡枝幸町歌登大曲
まがりかわ（曲川）北海道余市郡赤井川村曲川
みなみおおまがり（南大曲）北海道白糠郡白糠町南大曲

【青森県】

せんがり（千刈）青森県青森市千刈
おおまがり（大曲）青森県むつ市大曲
かなまがり（金曲）青森県むつ市金曲
さがりまつ（下り松）青森県平川市岩館下り松
こまがり（小曲）青森県五所川原市小曲
おおまがり（大曲）青森県南津軽郡田舎館村大曲
おおまがり（大曲）青森県上北郡六戸町犬落瀬大曲
せんがりだ（千刈田）青森県上北郡おいらせ町千刈田

【岩手県】

ごせんがり（五千刈）岩手県奥州市水沢五千刈
まがりふち（曲淵）岩手県一関市萩荘曲淵
おおまがりちょう（大曲町）岩手県北上市大曲町
せんがりだ（千刈田）岩手県岩手郡雫石町千刈田

【秋田県】

おおまがり（大曲）秋田県能代市大曲
ごせんがり（五千苅）秋田県能代市二ツ井町五千苅
さんぜんがり（三千苅）秋田県能代市二ツ井町三千苅
がりゅうざん（臥竜山）秋田県能代市臥竜山
おおまがり（大曲）秋田県大仙市大曲 ※
せんがり（千刈）秋田県湯沢市千刈
せんがり（千刈）秋田県由利本荘市千刈
まがりさわ（曲沢）秋田県由利本荘市曲沢
ななまがりたい（七曲岱）秋田県大館市七曲岱
さがり（佐加里）秋田県横手市大雄佐加里
ひゃくまんがり（百万刈）秋田県横手市百万刈

※秋田藩士石井忠行の『伊頭園茶話』に、「享保十五年（1730）に大麻刈を大曲に改めた」とある。

【山形県】

せんがり（千刈）山形県山形市千刈
ななじゅうがり（七十刈）山形県山形市七十刈
さんぜんがり（三千刈）山形県鶴岡市三千刈
まがりがわ（曲川）山形県最上郡鮭川村曲川

【宮城県】

かみやがり（上谷刈）宮城県仙台市泉区上谷刈
おおまがり（大曲）宮城県名取市大曲
おおまがり（大曲）宮城県東松島市大曲
おおまがり（大曲）宮城県登米市豊里町大曲
いちのまがり（一ノ曲）宮城県登米市南方町一ノ曲
しんいちのまがり（新一ノ曲）宮城県登米市南方町新一ノ曲
ごひゃくがり（五百刈）宮城県加美郡加美町五百刈
はっぴゃくがり（八百刈）宮城県遠田郡涌谷町八百刈
せんがりば（千刈場）宮城県伊具郡丸森町千刈場

【福島県】

おおまがり（大曲）福島県相馬市大曲
せんがり（千刈）福島県伊達市保原町千刈
ななまがり（七曲）福島県伊達郡川俣町七曲
せんがり（千苅）福島県喜多方市千苅
ななひゃくがり（七百苅）福島県喜多方市七百苅
ろっぴゃくがり（六百刈）福島県喜多方市六百刈
よんひゃくがり（四百苅）福島県喜多方市四百苅

ひゃくがりだ（百苅田）福島県喜多方市百苅田
ななじゅうがり（七十苅）福島県喜多方市山都町七十苅
かわまがり（川曲）福島県郡山市田村町川曲
せんがり（千苅）福島県大沼郡会津美里町本郷千苅
ごひゃくがり（五百苅）福島県耶麻郡猪苗代町五百苅
かけあがり（欠上り）福島県耶麻郡猪苗代町欠上り
まがりだ（曲田）福島県河沼郡会津坂下町曲田
まがりのうち（曲ノ内）福島県石川郡石川町曲ノ内

【新潟県】

かみまがりどおり（上曲通）新潟県新潟市南区上曲通
しもまがりどおり（下曲通）新潟県新潟市南区下曲通
おおまがと（大曲戸）新潟県長岡市大曲戸
まがりあらまち（曲新町）新潟県長岡市曲新町
おおまがり（大曲）新潟県燕市大曲
ささまがり（笹曲）新潟県燕市笹曲
せんがり（千刈）新潟県加茂市千刈
まがりたに（曲谷）新潟県三条市曲谷
まがりふち（曲渚）新潟県三条市曲渚
とがり（戸狩）新潟県上越市板倉区戸狩
さがり（下里）新潟県阿賀野市下里
しりあがり（尻上）新潟県五泉市尻上
たむぎちがり（田麦千刈）新潟県岩船郡関川村田麦千刈
せんがりしんでん（千苅新田）新潟県南蒲原郡田上町千苅新田

【茨城県】

おおまがり（大曲）茨城県取手市大曲
 まがりまつ（曲松）茨城県潮来市曲松
 さがりまつ（下り松）茨城県結城市下り松

【千葉県】

ななまがり（七曲）千葉県木更津市茅野七曲
 ななまがり（七曲）千葉県木更津市山本七曲
 ななまがり（七曲）千葉県佐倉市七曲
 おおとがり（大角）千葉県香取市大角
 かまがり（鎌苅）千葉県印西市鎌苅

【群馬県】

かわまがりまち（川曲町）群馬県前橋市川曲町
 まがりさわちょう（曲沢町）群馬県伊勢崎市曲沢町
 おおまがり（大曲）群馬県邑楽郡板倉町大曲

【神奈川県】

まがりまつ（曲松）神奈川県秦野市曲松
 おおまがり（大曲）神奈川県高座郡寒川町大曲

【山梨県】

おまがりちょう（小曲町）山梨県甲府市小曲町
 なつがり（夏狩）山梨県都留市夏狩
 かもがりつむぎ（鴨狩津向）山梨県西八代郡市川三郷町鴨狩津向

【長野県】

とがり（戸狩）長野県下高井郡山ノ内町戸狩
 がりゅう（臥竜）長野県須坂市臥竜

【富山県】

まがりぶち（曲淵）富山県富山市水橋曲淵
 ななまがり（七曲）富山県南砺市七曲
 まがりぶち（曲淵）富山県滑川市曲淵

【石川県】

ななまがりまち（七曲町）石川県金沢市七曲町
 まがりまち（曲町）石川県金沢市湯涌曲町
 さんじゅうがりまち（三十蒔町）石川県金沢市三十蒔町
 まがりまち（曲町）石川県七尾市能登島曲町
 あがりえまち（上り江町）石川県小松市上り江町
 ねあがりまち（根上町）石川県能美市根上町
 さがりし（下石）石川県羽咋郡宝達志水町下石

【福井県】

かしまがり（檜曲）福井県敦賀市檜曲
 あがり（安賀里）福井県三方上中郡若狭町安賀里

【静岡県】

にしおおまがりちょう（西大曲町）静岡県静岡市清水区西大曲町
 ひがしおおまがりちょう（東大曲町）静岡県静岡市清水区東大曲町
 まがりかね（曲金）静岡県静岡市駿河区曲金
 うがり（宇刈）静岡県袋井市宇刈
 ふじまがり（藤曲）静岡県駿東郡小山町藤曲
 かみとがり（上土狩）静岡県駿東郡長泉町上土狩
 しもとがり（下土狩）静岡県駿東郡長泉町下土狩
 なかとがり（中土狩）静岡県駿東郡長泉町中土狩

【岐阜県】

まがり（曲利）岐阜県羽島市正木町曲利
 おとがり（乙狩）岐阜県美濃市乙狩
 とがり（戸狩）瑞浪市明世町戸狩
 あがりまち（上利町）岐阜県関市上利町
 まがり（馬狩）岐阜県大野郡白川村馬狩

【愛知県】

きたがり（北蒔）愛知県あま市北蒔
 あがりど（上り戸）愛知県知多市上り戸
 たいらおがりちょう（平尾蒔町）愛知県稲沢市平尾蒔町
 とがりちょう（渡刈町）愛知県豊田市渡刈町
 とがり（戸蒔）愛知県一宮市萩原町戸蒔

【三重県】

まがりちょう（曲町）三重県松阪市曲町
 うちごまがりちょう（内五曲町）三重県松阪市内五曲町
 そとごまがりちょう（外五曲町）三重県松阪市外五曲町
 くらがり（暮明）三重県いなべ市員弁町暮明
 すがりちょう（須賀利町）三重県尾鷲市須賀利町

【滋賀県】

かまがりちょう（河曲町）滋賀県東近江市五個荘河曲町
 かみまがり（上鉤）滋賀県栗東市上鉤
 しもまがり（下鉤）滋賀県栗東市下鉤

【京都府】

さがりまつちょう（下り松町）京都府京都市下京区下り松町
 かがりちょう（篝町）京都府京都市右京区梅ヶ畑篝町
 はしあがりちょう（走上町）京都府京都市右京区走上町
 さがりまつちょう（下り松町）京都府京都市左京区一乗寺下り松町
 さがりちょう（下り町）京都府京都市山科区東野片下り町

【奈良県】

まがりかわちょう（曲川町）奈良県橿原市曲川町
 さがりお（下り尾）奈良県桜井市下り尾

【大阪府】

かがりだい（かがり台）大阪府富田林市かがり台

【兵庫県】

おおさがり（大下り）兵庫県佐用郡佐用町大下り

【和歌山県】

ななまがり（七曲り）和歌山県和歌山市七曲り
 まがりかわ（曲川）和歌山県田辺市本宮町曲川

【愛媛県】

とがり（戸雁）愛媛県宇和島市三間町戸雁

【岡山県】

まがり（曲り）岡山県真庭市**曲り**

【広島県】

かがり（篝）広島県三原市八幡町**篝**

かまがりちょう（蒲刈町）広島県呉市**蒲刈町**

しもかまがりちょう（下蒲刈町）広島県呉市**下蒲刈町**

あがりはら（上里原）広島県庄原市高野町**上里原**

【鳥取県】

たかがり（鷹狩）鳥取県鳥取市用瀬町**鷹狩**

まがり（曲）鳥取県東伯郡北栄町**曲**

あがりみちちょう（上道町）鳥取県境港市**上道町**

さがりかや（下蚊屋）鳥取県日野郡江府町**下蚊屋**

【島根県】

あかがりちょう（赤雁町）島根県益田市**赤雁町**

【山口県】

かわまがり（川曲）山口県周南市**川曲**

ひがしふじまがり（東藤曲）山口県宇部市**東藤曲**

ふじまがり（藤曲）山口県宇部市**藤曲**

いわがり（岩狩）山口県光市**岩狩**

【福岡県】

にしまがりまち（西曲里町）福岡県北九州市八幡西区**西曲里町**

ひがしまがりまち（東曲里町）福岡県北九州市八幡西区**東曲里町**

ひあがり（日明）福岡県北九州市小倉北区**日明**

まがり（曲）福岡県宗像市**曲**

まがりぶち（曲渚）福岡県福岡市早良区**曲渚**

くわまがり（桑曲）福岡県飯塚市**桑曲**

あがりまつ（上り松）福岡県築上郡築上町**上り松**

えまがり（江曲）福岡県柳川市三橋町**江曲**

【佐賀県】

たみちがり（田道ケ里）佐賀県神埼市田道ケ里
 えきがり（駅ケ里）佐賀県神埼市神埼町田道ケ里 駅ケ里
 ひらがり（平ケ里）佐賀県神埼市神埼町田道ケ里 平ケ里
 おづがり（小津ケ里）佐賀県神埼市神埼町永歌小津ケ里
 にしおづがり（西小津ケ里）佐賀県神埼市神埼町永歌西小津ケ里
 えだがり（枝ケ里）佐賀県神埼市神埼町枝ケ里
 のめがり（野目ケ里）佐賀県神埼市野目ケ里
 そねがり（曽根ケ里）佐賀県神埼市曽根ケ里
 いいがり（石井ケ里）佐賀県神埼市神埼町鶴石井ケ里
 とうのがり（東野ケ里）佐賀県神埼市千代田町餘江東野ケ里
 よしのがり（吉野ケ里）佐賀県神埼郡吉野ケ里町
 おおまがり（大曲）佐賀県神埼郡吉野ケ里町 大曲
 おおつかがり（大塚ケ里）佐賀県神埼郡吉野ケ里町大曲 大塚ケ里
 ふせがり（布施ケ里）佐賀県小城市小城町布施ケ里
 うりゅうがり（生立ケ里）佐賀県小城市牛津町乙柳生立ケ里
 くつわがり（轡ケ里）佐賀県小城市小城町大字畑田字轡ケ里
 おおまがり（大曲）佐賀県伊万里市南波多町大曲
 とがり（戸ケ里）佐賀県杵島郡白石町戸ケ里
 まがりかわ（万賀里川）佐賀県唐津市肥前町万賀里川

【長崎県】

まがり（曲）長崎県対馬市厳原町曲

【大分県】

まがり（曲）大分県大分市曲

【熊本県】

さがり（嵯峨里）熊本県人吉市下原田町嵯峨里

【鹿児島県】

のがみまがり（野神曲）鹿児島県志布志市有明町野神曲

【沖縄県】

まがり（真我里）沖縄県島尻郡久米島町真我里
 あがりざき（東崎）沖縄県中頭郡西原町東崎
 あがりはま（東浜）沖縄県島尻郡与那原町東浜
 あがりやま（東山）沖縄県うるま市石川東山

※小城市の史料に多数の「ケ里」旧地名痕跡あり。

「ケ里」地名の一覧

※佐賀県にしかない。大曲も加えた。

たみちがり（田道ケ里）	佐賀県 神崎市	田道ケ里
えきがり（駅ケ里）	佐賀県 神崎市 神埼町	田道ケ里 駅ケ里
ひらがり（平ケ里）	佐賀県 神崎市 神埼町	田道ケ里 平ケ里
おづがり（小津ケ里）	佐賀県 神崎市 神埼町 永歌	小津ケ里
にしおづがり（西小津ケ里）	佐賀県 神崎市 神埼町 永歌	西小津ケ里
えだがり（枝ケ里）	佐賀県 神崎市 神埼町	枝ケ里
のめがり（野目ケ里）	佐賀県 神崎市	野目ケ里
そねがり（曽根ケ里）	佐賀県 神崎市	曽根ケ里
いしいがり（石井ケ里）	佐賀県 神崎市 神埼町 鶴	石井ケ里
とうのがり（東野ケ里）	佐賀県 神崎市 千代田町 餘江	東野ケ里
よしのがり（吉野ケ里）	佐賀県 神埼郡	吉野ケ里町
おおまがり（大曲）	佐賀県 神埼郡	吉野ケ里町 大曲
おおつかがり（大塚ケ里）	佐賀県 神埼郡	吉野ケ里町 大曲 大塚ケ里
ふせがり（布施ケ里）	佐賀県 小城市 小城町	布施ケ里
うりゅうがり（生立ケ里）	佐賀県 小城市 牛津町 乙柳	生立ケ里
くつわがり（轡ケ里）	佐賀県 小城市 小城町 大字畑田 字	轡ケ里
とがり（戸ケ里）	佐賀県 杵島郡 白石町	戸ケ里
おおまがり（大曲）	佐賀県 伊万里市 南波多町	大曲
まがりかわ（万賀里川）	佐賀県 唐津市 肥前町	万賀里川

佐賀県以外の九州地方の「がり」地名一覧

【福岡県】

にしまがりまち（西曲里町）	福岡県	北九州市	八幡西区	西曲里町
ひがしまがりまち（東曲里町）	福岡県	北九州市	八幡西区	東曲里町
ひあがり（日明）	福岡県	北九州市	小倉北区	日明
まがり（曲）	福岡県	宗像市	曲	
まがりぶち（曲渚）	福岡県	福岡市	早良区	曲渚
くわまがり（桑曲）	福岡県	飯塚市	桑曲	
あがりまつ（上り松）	福岡県	築上郡	築上町	上り松
えまがり（江曲）	福岡県	柳川市	三橋町	江曲

【長崎県】

まがり（曲）	長崎県	対馬市	厳原町	曲
--------	-----	-----	-----	---

【大分県】

まがり（曲）	大分県	大分市	曲	
--------	-----	-----	---	--

【熊本県】

さがり（嵯峨里）	熊本県	人吉市	下原田町	嵯峨里
----------	-----	-----	------	-----

【鹿児島県】

のがみまがり（野神曲）	鹿児島県	志布志市	有明町	野神曲
-------------	------	------	-----	-----

関西二府四県の「がり」を含む地名

【滋賀県】

かまがりちょう（曲町） 滋賀県 東近江市 五個荘河 **曲町**
 かみまがり（上鉤） 滋賀県 栗東市 **上鉤**
 しもまがり（下鉤） 滋賀県 栗東市 **下鉤**

【京都府】

さがりまつちょう（下り松町） 京都府 京都市 下京区 **下り松町**
 かがりちょう（篝町） 京都府 京都市 右京区 梅ヶ畑 **篝町**
 はしあがりちょう（走上町） 京都府 京都市 右京区 **走上町**
 さがりまつちょう（下り松町） 京都府 京都市 左京区 一乗寺 **下り松町**
 さがりちょう（下り町） 京都府 京都市 山科区 東野片 **下り町**

【奈良県】

まがりかわちょう（曲川町） 奈良県 橿原市 **曲川町**
 さがりお（下り尾） 奈良県 桜井市 **下り尾**

【大阪府】

かがりだい（かがり台） 大阪府 富田林市 **かがり台**

【兵庫県】

おおさがり（大下り） 兵庫県 佐用郡 佐用町 **大下り**

【和歌山県】

ななまがり（七曲り） 和歌山県 和歌山市 **七曲り**
 まがりかわ（曲川） 和歌山県 田辺市 本宮町 **曲川**

「がり」地名の言素論による考察

- (1) 「がり」は地名接尾語のように見える。吉野ヶ里などが典型。
- (2) 「がり」を更にわければ、格助詞としての「が」(例:我が家の「が」)と「里(り)」の組み合わせではないか。
- (3) 従って、東北地方に多い「大曲」地名は、「おおま」+「が」+「り」と理解し得る。
- (4) その場合の語幹「おおま」は「大間」、すなわち、「大きな」+「ま」である。青森県下北郡大間町の「大間のまぐろ」は有名。
- (5) 「ま」は地名接尾語で、「場所・領域」の意味と思われる。
(例: 浜、山、島、沼、隈、浅間、鞍馬、志摩、薩摩、羽島、大間、入間、球磨、須磨、埼玉、朝妻、筑摩、千曲、赤間、海部、有間、生駒、石窯、中間、三苫、當麻、など)
- (6) 北海道の大曲や福島県郡山市の川曲は、川の蛇行を表す地名の可能性もあり、こうした地名由来にも配慮が必要である。

古田武彦『失われた九州王朝』に次の一節がある。

14

蝦夷国 本書の論証の目指すところは、九州に連続した王権にあった。これと近畿の王権との関連が焦点となってきたのである。けれども、これと対をなすべき問題がある。近畿の王権の、さらに東方に位置した「**蝦夷国**」の問題だ。〔『失われた九州王朝』ミネルヴァ書房 版 二一三～二一七頁〕

この書き出しの後、『日本書紀』齊明五年(659)条の蝦夷記事を取り上げて、次のように指摘する。

ハッキリいえば、何か 珍獣、まがいの扱いだ。(中略)

このような『日本書紀』の文面にふれたあと、わたしは中国側の文献『冊府元龜(さつぷげんき)』の中に、つぎの文面を見出して、ハッと胸を突かれた。「(顯慶四年、六五九、高宗) 十月、**蝦夷国、倭国の使に随いて入朝す**」(冊府元龜、外臣部、朝貢三)。ここでは、蝦夷国人は観賞用の「珍獣」でも、「珍物」でもない。レッキとした蝦夷国の国使として、唐朝に貢献してきた、と記録されている。年代も『日本書紀』とピッタリ一致している。

以上の結論と関連事項を記そう。

(一) 『日本書紀』本文は、日本列島全体を「近畿天皇家の一元支配下」に描写した。ために、「蝦夷国」を日本列島東部の、天皇家から独立した国家とする見地を、故意に抹殺して記述している。これは九州に対し、たとえば磐井を「国造」「叛逆」として描写するのと同じ手法である。

(二) 「蝦夷国の国使派遣」は、歴史事実であるにもかかわらず『旧唐書』『新唐書』には記されていない。これは舒明二年（六三〇）の近畿天皇家派遣の遣唐使が、『旧唐書』や『新唐書』に記載されていないのと同じ扱いである。すなわち、倭人を代表する王権ではなく、辺域に国家として、いまだ『旧唐書』などの「正史」には記載されていないのである。

(三) なお、これと類似した現象は、『冊府元龜』の「琉球国」の記事においてもあらわれている。「煬帝、大業三年（六〇七）三月、羽騎尉朱寛を遣わして、琉球国に使せしむ」〈冊府元龜、外臣部、通好〉。ただし、「琉球国」の場合は、『隋書』倭国伝においても、すでに「倭国」とは別個に出現している。

以上、日本列島内の多元的国家の共存状況と、『日本書紀』の一元的描写。——両者の対照があざやかである。

「蝦夷国」深奥の謎、和訓「えみし」

古田武彦氏は蝦夷国の造字は中国側によるもので、蝦夷の音はカイとする。他方、日本古代史学では蝦夷をエミシと訓むのが常だ（後にエゾと訓む史料が現れる）。しかしなぜ、わが国では蝦夷をエミシと訓むのか、ここに蝦夷国研究における深奥の謎がある。

エミシという名称の初出は『日本書紀』神武紀だ。

愛彌詩烏、毗儻利、毛々那比苔、比苔破易陪迺毛、多牟伽毗毛勢儒。
〔**えみし**を、ひだり、ももなひと、ひとはいへども、たむかひもせず〕

「ひだり」は 〃ひとり、。「ももなひと」は 〃百（もも）な人、。

『岩波古典文学大系』

盗まれた神武紀の愛瀾詩説話

古田氏は愛瀾詩を、神武の軍の相手側、大和盆地の現地人を指している、とした。わたしは愛瀾詩を二二ギが戦った北部九州の先住民と考えている。

わたしは記紀に見える神武東征記事に天孫降臨説話が盗用されているとする説を発表した。神武東征説話中に、大和侵攻の主体を「天神御子」(古事記)・「天神子」(日本書紀)とする記事が突然のように紛れ込んでいることに注目し、神武は「天孫」(アマテラスの子孫)ではあっても、「天神御子」「天神子」(アマテラスの子)ではないとして、この「天神御子」「天神子」説話部分は天孫降臨時の二二ギの筑紫・肥前侵攻説話の盗用とした。

こうした視点に立てば、「天皇」説話に紛れ込んでいる愛瀾詩との戦闘譚も二二ギらによる天孫降臨説話であり、そこに現れる愛瀾詩は北部九州(筑紫・肥前)の先住民ではあるまいか。

二二ギに追われた愛瀾詩(エミシ)と呼ばれ人々は筑紫から東北地方(蝦夷国)に落ち延び、そのため蝦夷国はエミシ国と呼ばれるようになったのだ。

垂柳遺跡は、青森県南津軽郡田舎館村にある弥生時代中期(2100～2000年前)の遺跡。

656面の水田跡が検出され、それまで東北地方北部における弥生時代の水田稲作は否定的であったが、**津軽平野のみ**であるが稲作をはじめとする弥生文化が受容されていた可能性が濃くなった。



垂柳水田遺跡



砂沢遺跡

砂沢遺跡は、青森県弘前市三和にある弥生時代前期(2400～2300年前)の**本州最北端最古の水田跡遺跡**。

北部九州を起源とする**遠賀川系土器**が出土しており、**九州北部の稲作農耕**が、日本海沿岸を經由して**津軽平野**へ伝播してきたことが分かった。

天孫降臨の時代(弥生前期末～中期初頭)、稲作が北部九州から津軽に伝播している。この伝承が「東日流外三郡誌」に記されている。

葦原談儀

(中略)

日の国より**築紫**を侵領せし一族は**日向一族**と称し、農を営み長き年月を経して遂に築紫の国を掌中に治し、土民より活神の坐に崇められたり。(中略)やがて、日本国の中央なる耶馬台国をめざして兵を挙げり。

時に耶馬台国には、**安日彦**、**長髓彦**が五畿七道に君臨して日向一族の侵領に応戦せり。(中略)

依て、安日彦は深傷なる弟長髓彦を護り乍ら、山を越へ谷を渡り、一族の者を俱に北に落忍びて**東日流**に来るや、広莫たる津軽の葦原を眼にするや、これぞまさしく日本中央にして吾が新しき国土を起さんとして、農を以て拓せり。(中略)
東日流の平野は**田畑**のみらるゝに至るは**この頃**なり。

稲作は**ホコネ**と曰ふ**稲穂**なり。遠く韓国より来る種なり。この稲は寒きに強く亦寒冷の水にも強き故に東日流またゝくまに拓田の盛んならしむる兆となれり。(後略)

寛政五年(1793)二月七日 秋田孝季

《八幡書店『東日流外三郡誌1』439～441頁》



安倍大觀記

奥州に下向せし**長髓彦**、**安日彦**の一族は**日向族**に故地を奪取侵領されたるや北落し、安住地を求めたり。(中略)

依りて一族は日本の国末**奥州東日流安東浦**に到りて安住し、一族を荒吐族と称して**長髓彦**及び**安日彦**、**巖鬼川**を**東西**に堺を定めて、各々**君臨**せり。

これぞ安倍一族の創世也。

延文二年(1357) 会津加茂神社 宮司大和介書

右書は漢文也、現は会津神明宮に蔵す。

寛政五年(1793)

秋田孝季

《八幡書店『東日流外三郡誌1』452頁》

荒覇吐族とは吾等なり

(前略)世降りて、**倭**より移りきたる民ありて是を**耶馬台族**と曰ふ。亦、破船にて漂着せし民あり。是を阿耶族また久耶漢族の二族ありて、耶馬台族と併合せり。**ホコネ**と称す**稻種**を**東日流大里**に耕作せども、稔豊かならず、飽田、越国へと移りて勢をなし、是を荒覇吐族と曰ふ。(中略)

明治二十年(1885)八月十九日

和田末吉

本誌之原著者 秋田孝季/和田壹岐

和田末吉再筆

原本虫喰亦老朽に依つて再写す 津輕飯詰之住人和田長作蔵す 《八幡書店『東日流外三郡誌1』241～243頁》

津軽に逃げた安日王伝承

倭国(筑紫)と蝦夷国(津軽)の古くからの交流を示す伝承史料がある。秋田氏の系図と祖先伝承だ。「藤崎系図 安倍姓」には始祖を「孝元天皇」とするが、その後「開化天皇—大毘古命—建沼河別命—安部將軍—安東—(後略)」と続き、「建沼河別命」と「安部將軍」の間に次の傍記がある。

兄**安日王**

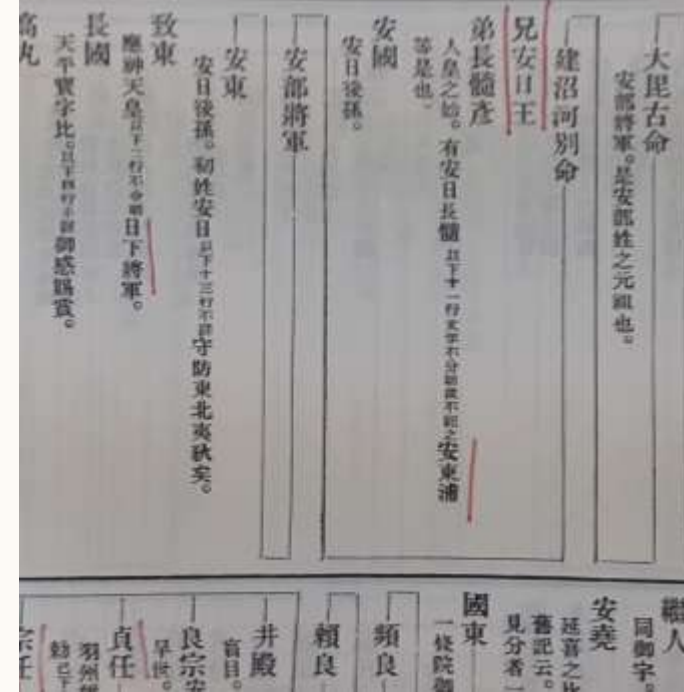
弟**長髓彦**

人皇之始。有**安日 長髓**〈以下十一行文字不分明故付記之〉**安東浦**等
是也。

安国

安日後孫。 ※〈〉内は細注。

ここに見える**安東浦**とは**西津軽群深浦町深浦**のこと。この系図に記された子孫に、前九年の役で敗死した安倍貞任がいる。これら安東(安藤)氏系図には自らの出自を蝦夷とする例が散見される。また秋田家系図では、安日王は弟の長髓彦が神武天皇の東征の時に河内の日下で抵抗し殺された後、津軽に逃れ安倍一族の始祖となったとある。



青森の**日本中央**碑と佐賀の**中央**碑

「**日本中央**」碑が**青森県東北町**にあるが、**佐賀県**にも「**中央**」碑がある。佐賀平野の地神信仰に「チュウオウサン」(中央神)がある。この中央神は古い家々の庭先の、多くはいぬい(乾・北西)やうしとら(艮・北東)のすみに祀られ、小さな石か石塔が立っている。文字を刻んだものは「中央」「中央尊」「中央社」とある。これらは大地の神を祀ったもので、旧佐賀市内や神埼郡に多く分布しており、**「ケ里」地名分布と重なる。**



この中央神は肥前盲僧の持経「地神陀羅尼王子経」などに、**荒神**が中央を占めて四季の土用をつかさどると説くことに由来するが、この佐賀の中央碑は青森県の「日本中央」碑と同じ淵源を持つのではあるまいか。佐賀県の「中央」碑は、「あまり粗末にしても、あまり丁寧にお祭りしてもいけない」と言い伝えられてる。



蝦夷国における津軽の特殊性

『日本書紀』斉明五年(659)条の「伊吉連博徳書」に次の蝦夷国記事が見える。

「天子問いて曰く、蝦夷は幾種ぞ。使人謹しみて答ふ、類(たぐい)三種有り。遠くは都加留(つかる)と名づけ、次は麿蝦夷(あらえみし)、近くは熟蝦夷(にきえみし)と名づく。今、此(これ)は熟蝦夷。毎歳本國の朝に入貢す。」

倭国の使者が唐の天子に、蝦夷国には都加留と麿蝦夷と熟蝦夷の三種類があると答えている。都加留とは今の津軽(青森県西部)のことと思われる。熟蝦夷は太平洋側の陸奥国領域、麿蝦夷は日本海側の出羽国領域か。

麿蝦夷と熟蝦夷はいずれも東北地方の数県にまたがる広領域。都加留は青森県の西半分に過ぎず、三種ある蝦夷の一つにしてはアンバランス。しかも都加留には「蝦夷」という表記がない。狭領域でありながら、三種の蝦夷の一つとして広領域の麿蝦夷・熟蝦夷と並んで、唐の天子に紹介されている。



筑紫と津輕は弥生時代から交流があった。

『**筑紫と津輕の交流**』は蝦夷国研究の重要な視点だ。

「がり」地名分布調査の所見と考察

〔Ⅰ〕「がり」地名が東北地方と佐賀県に濃密分布しており、両地域の人々が過去のある時代に交流していたと考えることができる。

〔Ⅱ〕考古学的には、福岡市の板付水田(弥生時代)と同じ工法による水田が津軽で出土していることや、弥生時代の遠賀川式土器が津軽の水田遺跡から出土している。これは、両地域の人々が日本海ルートを通じて、弥生時代に交流していたことを示す。

〔Ⅲ〕秋田家系図や東日流外三郡誌には、安日彦・長脛彦兄弟が日向の賊(神武天皇のことと記す)に追われ、津軽に逃げた伝承が記されている。これも弥生時代の天孫降臨(二二ギらによる筑紫侵攻)による出来事と考えられる。

〔Ⅳ〕神武紀には「愛瀾詩(エミシ)」という人物(集団)のことが記されており、蝦夷国をえみし国と読むのは、この集団が二二ギらに追われて津軽に逃げ、その地に定住したことによるのではないか。こうした歴史背景が無ければ、蝦夷をエミシと読む理由がない。

〔Ⅴ〕青森県には「日本中央」碑があり、佐賀県には「中央神」石碑がある。佐賀県では現在もその祭祀が続けられている。

〔Ⅵ〕以上の知見を総合すると、筑紫・肥前の愛瀾詩(エミシ)と呼ばれた安日彦・長脛彦の勢力が天孫族に追われて津軽へ落ち延び、その地を拠点として蝦夷国が成立したとする仮説へ至る。「がり」地名分布もこの仮説により、説明が可能。

「がり」地名の研究

肥前から逃げた愛瀬詩

2026年9月12日(土)
和田家文書研究会
古賀達也

ご清聴、ありがとう
ございました。

2026 年 7 月 16 日世界遺産登録 15 周年記念で秘仏「一字金輪仏頂尊」公開 の報道。
中尊寺所有の重要文化財として管理され、通常は秘仏として保管され、御開帳の際には讃衡蔵の秘
仏室で公開された。



中尊寺 一字金輪仏頂尊



郡上市白鳥 石徹白大師堂 虚空蔵菩薩像

【岐阜・石徹白大師堂 虚空蔵菩薩像】元は白山中居神社の神体。
【伝承】藤原秀衡が平泉で鑄造させて白山信仰のために寄進した。平泉系仏教美術との共通性。
平泉にある像で特に似ている＝中尊寺所蔵の「一字金輪仏坐像」。
2022 年 10 月 「白山神と加賀犀川を巡る」

1986 年；石徹白の虚空蔵菩薩坐像が平泉へ里帰りした際、この一字金輪仏像と並べて公開。



両像とも奥州藤原氏ゆかりの金銅仏で、平安末期の
仏師集団による制作を思わせる作風を持つ。
様式的な類似という意味では、中尊寺金色堂内の諸
菩薩像・毛越寺や達谷窟系統に伝わる平安末期の菩
薩像にも共通する。ふっくらした顔立ち・優美な衣
文・華麗な宝冠・定朝様を受け継ぐ穏やかな表情な
ど。これらは奥州藤原文化の仏像に共通する特徴。

白山中居神社

中尊寺での佛頂尊史料

① 佐々木邦世『中尊寺史稿』1983年(昭和58年) 発行中尊寺

「中尊寺は寺内に17ヶ院の支院を包括するいわゆる一山寺院である。」

「一山支院沿革」の章では、金色院、西谷大長寿院と続き、三番目に山王堂別当常住院南谷坊。

この坊に一字金輪像が安置。(←以前)

常住院南谷坊の記載内容

1, 建武4年(1337)の火災(梵鐘銘一後述)で焼失したとする寺伝がある。

2, 安永4年(1775)の『関山風土記』を抄録すると

「大日如来 木造座像 運慶作、但世俗 人色の大日尊、人膚大日尊とも 秀衡持佛堂本尊」

3, 天保12年(1842) 「一山寺中由緒書上草稿」

「日吉山王社 一字金輪 金輪閣ノ本尊ニして炎焼ノ後當社ニ奉安ス」

「金輪閣の本尊であった一字金輪佛が炎焼したのでこの山王社に奉安された」「天台では釈迦と大日を一体と説く」から「一字金輪佛が釈迦佛を本地とする山王社に遷された」。



② 石田茂作博士(仏像学者)『中尊寺大鏡 第二』1941年(昭和16年)11月 大塚巧藝社

「國寶 一字金輪大日如来像」

「形象は金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦念佛儀軌による」

=一字金輪大日如来の図像的な根拠經典が、その儀軌にあるという意味。

金剛頂經；密教の根本經典群の総称。真言宗では『大日經』と並ぶ最重要經典。

一字頂輪王；一字金輪仏頂尊のこと。

「一字」は種子が一字で表されること、梵字一文字「ボロン」=金輪界大日を象徴する。「頂輪王」=仏頂尊の王者。

瑜伽(ゆが)；サンスクリット語 Yoga の音写。仏と行者が一体化する観法・修法を意味。

一切時處=「あらゆる時、あらゆる場所で」。念誦=真言を唱える修法。

念仏；ここでは阿弥陀仏信仰の念仏ではなく、仏を観想し、その徳を念じること。

儀軌：修法の手順書。密教では尊像の姿、印契、真言、観想法（三密）を定めた実践マニュアル。

真言（マントラ）。

「背面は略して、懸け仏のよう。光背への密着を想定か。前半身の像。腕の方まで空洞。天蓋は横長の楕円(奥行き浅い)→当初からの造り。形服は素月の如し*、五智*の金剛王冠を戴き、**智拳の大印**(大日如来)を持し、獅子座に処す。日輪、白蓮の台なり。延宝4年(1676)修理の札あり。腕先まで空洞・内えぐりであったかの理由はわからず。」

* 形服（ぎょうふく・けいふく）＝ 姿かたちと衣服、全体の外観。素月（そげつ）＝ 白く澄んだ月、満月。

五智＝大日如来の智慧が五つのはたらきとして展開したもの。密教の仏がいただく宝冠で、一般には五仏宝冠という。

智拳＝密教における大日如来の根本印で、一般には智拳印。

③ 藤島亥治郎監修 佐々木邦世執筆 『平泉』中尊寺発行 1986年

「一字金輪大日如来」「金輪閣の本尊にして、炎焼の後山王社に奉安す。(略)」

「建武4年の災禍に、金色堂の前（東側）にあった重層の金輪閣も焼失したが、幸い本尊の一字金輪佛は運び出され、」

像内に修理の棟札

「延宝4年（1672）伊勢国荒木田庄の朝熊山の住僧理圓法師が、奥州修行の途上、この像の大破しているのを見かねて修理彩色した。」

④ 2026年7月16日秘仏「一字金輪仏頂尊」公開

「金輪」と「佛頂」と最上級の名称を重ね持ち、仏格では最勝・最上の名称。仏頂＝仏の頭頂の肉髻（につけい）如来の頭上の隆起部分。仏頂には最上の智慧と神通力が宿る。人格化され仏頂尊の名称となる。

大佛次郎著『義経の周囲』朝日新聞 昭和42年（1967）署名入り 限定550冊 小倉遊亀→



中尊寺境内図

●建武4年の火災



『中尊寺史稿』「建武4年（1337）の火災（梵鐘銘）」

中尊寺の最奥に鐘楼があり案内板に

「康永2年（1343）に金色堂別当頼栄の発願により鑄造された梵鐘」。

銘文には池間が四區ある。池間とは梵鐘銘文の研究で使われる鐘身の区画名称のこと。

梵鐘に陽鑄された銘文**第一區**を記せば

「仰考平泉中尊寺草創歳序
長治二年春藤原清衡恭賜
堀河・鳥羽勅詔靈場也爰
建武四年回祿成阿□煨燼
頼榮勵推鐘利生志于後銘」

大意；

中尊寺の創建について考えると、長治2年（1105）春、藤原清衡が朝廷の恩命を奉じて建立し、建武4年に地獄の火災により灰燼に帰した。

「回祿」＝火災神から転じて大火。阿□煨燼で、□＝「鼻」か。猛火に焼かれて山中灰燼の意。頼榮は梵鐘建立によって衆生利益を実現しようと努力し、その由来を後世に残した。

長治2年春に清衡が「朝廷の恩命を奉じて」は？ 中尊寺の再建に着手したことは『和田家文書』中尊寺の別史料と一致。（注）和田家文書コレクション「平氏滅亡と平泉滅亡」

建武の**回祿**について；銘文からは戦乱による焼失とは読めない。失火 or 災け。

文治5年（1189）の頼朝軍による平泉侵攻、さらにこの建武4年（1337）の大火を経ながらも、金色堂と一字金輪佛頂尊が今日まで伝わった。＝歴史上の僥倖というべき。

第四區

「康永貳年大歳癸未七月 日
鑄師散位藤原助信
願主權律師頼榮
大檀那左近將監平親家
大檀那當國大將沙彌義慶」

紀年は北朝の年号で康永二年癸未七月（1343）。

鋳師は「散位藤原助信」を称している。散位とは朝廷の位階は持つが実職を持たない者の位。名誉称号か。社会的権威を帯びた鋳物師集団に属していたか。

願主は権律師頼榮。権律師は律師の次位で、高位の僧侶。

大檀那平親家は左近將監。「左近衛府の將監」という武官の官名をもつ。

大檀那義慶は沙彌（沙弥）あることから修行中の僧か。出家して法名を持つ武士もいた。

●『和田家文書』史料(括弧内は筆者注)

▼陸奥史審抄全 平泉昔灯絶逝

「（略）平泉中尊邸に前世に在りき安倍家寺跡・佛頂寺は跡形なきと相成て、茲に中尊佛頂像を造りて安置せりと日ふ。更にして奥州諸郡の佛寺よりこの諸寺大殿に集像されし古寺院にては、荷薩體の淨法寺本尊及び四天王、下閉伊西法寺より本尊及び羅漢像五百軀なり。更には和賀の極樂寺より移したる佛像一千軀と日ふ。（略） 延文二(1357)年三月六日」

▼平泉衣川佛頂寺由来 和田コレ

「皆黄金をなせる金色堂を建立せし藤原一族。中尊寺なる建立前にありし佛閣は、安倍一族が淨法寺末寺とて佛頂寺を建立せし跡地なり。（略）康平五年(1062)の役にて源氏に焼却されしより、清原武則再興せんとして勸進せしも後三年の役(1087)にて討死し、藤原經清が安倍一族・清原一族・平氏一族を菩提供養せんとして平泉に毛越寺(1150)・無量光院(秀衡)・中尊寺を元(大か)治元年(1126)に落慶せるも、子息清衡に依りて各寺棟その屬閣三百棟を建立せり。

依て安倍祖代の安置せし大日如来を再像せしは基衡にして、無量光院を全棟建立了しとき安倍一族の佛頂寺跡に建立せる中尊寺本堂に、一字金輪佛頂坐像と稱す大日如来を安置せり。亦佛寺各寺棟木に藤原清衡・基衡自ら筆なせるは、安倍氏・清原氏・平氏の菩提を念じて書染めたりと日ふなり。亦三丈の金色釋迦像胎内に、安日彦・長髓彦・安倍頼時・貞任・千代童丸の像を入魂なしける。

釋迦堂を建立なしけるも、幸いに文治五（1189）年の戦に火を蒙らざるも、建武四（1337）年に南面武士・南部長信に灾られ焼却せりと日ふ。長信、甲州源氏にて武田長信とも稱し、後なる南部藩・津輕藩の系に通ずる悪黨間者なり。源頼義以来、源氏に縁る者安倍頼時に縁る因縁ぞ、後なる東日流に南部守行が長信の子孫として来たり。永き安東一族との戦をなし、その子孫たる大浦平藏に一統されしは深ける悪因果なり。

寛政五年八月十二日

秋田孝季」

- ① 安倍氏の佛頂寺建立
- ② 清原氏による中尊寺再興
- ③ 奥州藤原氏への継承
- ④ 一字金輪佛頂尊安置
- ⑤ 建武4年の南部長信による中尊寺焼失